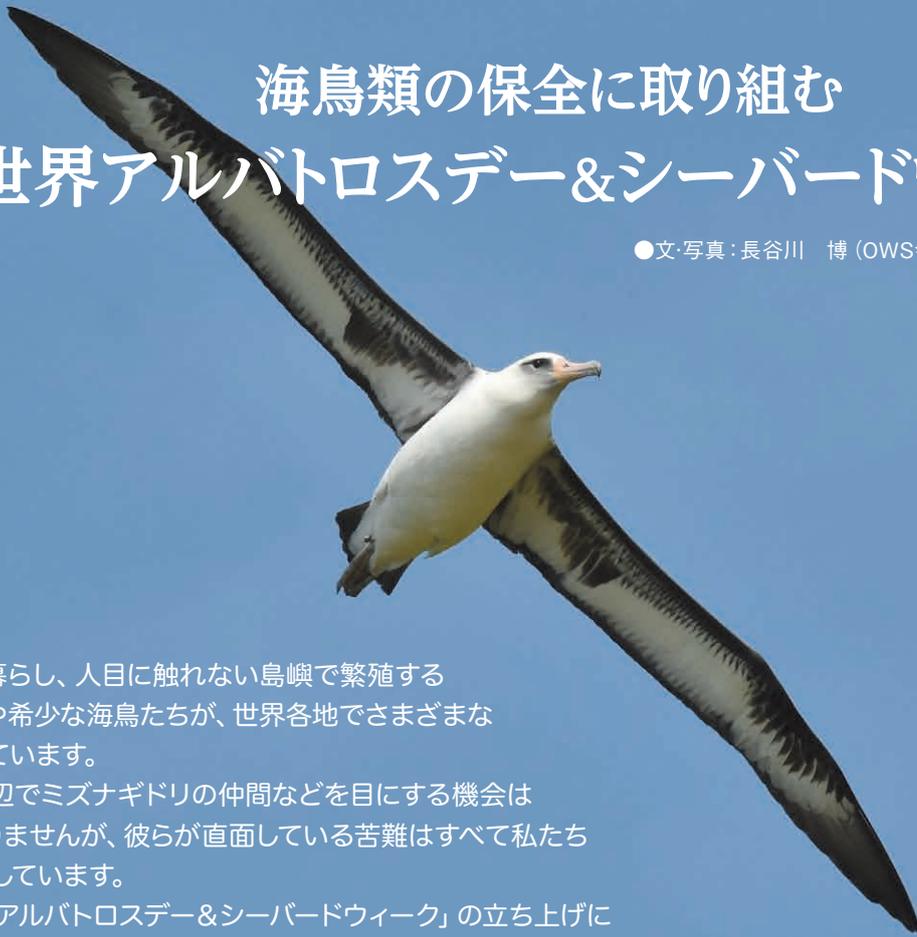


海鳥類の保全に取り組む 「世界アルバトロスデー&シーバードウィーク」

●文・写真：長谷川 博（OWS会長・東邦大学名誉教授）



伊豆諸島鳥島の上空を飛翔するコオキノタユウ

洋上を飛翔して暮らし、人目に触れない島嶼で繁殖するミズナギドリ類や希少な海鳥たちが、世界各地でさまざまな苦難に脅かされています。

私たちが普段海辺でミズナギドリの仲間などを目にする機会はそれほど多くありませんが、彼らが直面している苦難はすべて私たち人間社会に起因しています。

今号では、「世界アルバトロスデー&シーバードウィーク」の立ち上げに至った背景を長谷川博会長に解説いただきました。

苦境に立つ海鳥類

海洋は広大で、地球表面の約7割を占める。海洋は人間活動がさかんに行なわれている陸地から遠く離れているので、そこに生息している生物は人間活動の影響を受けにくいと、多くの人は考えるかもしれない。だが、プラスチック類による海洋汚染の拡大と深刻化にみられるように、人間活動の影響は今や海洋の隅々まで及んでいる。世界には約360種の海鳥類が生息しているが、そのうち110種、なんと約30%の種が存続を脅かされている。海鳥類は、ツル類などとともに、鳥類のうちでもっとも絶滅の危機に瀕しているグループの一つである。

海鳥類のうち、お互いに近縁な2つの仲間、すなわち、抜群の飛翔力をもつミズナギドリ類と潜水して水中を“飛翔”するペンギン類がとくに危機的状況にある（絶滅のおそれのある種は、前者で140種中64種、46%；後者で18種中10種、56%）。ミズナギドリ類のなかで

も、オキノタユウ類（註1）（Albatrosses）はいちだんと厳しい状況にある（22種中15種、68%で、準絶滅危惧種を含めると21種、95%）（表1）。

1990年代になり、オキノタユウ・ミズナギドリ類の減少が明らかになった。それに対処するため、The Agreement on the Conservation of Albatrosses and Petrels (ACAP) [ミズナギドリ目鳥類の保全に関する国際協定]が結ばれた（日本は未加盟だがオブザーバーとして出席）。2019年5月に開催された締約国会議で、この協定が2001年に調印された日に因んで、6月19日を「世界アルバトロスデー」(World Albatross Day)と定め、ミズナギドリ目鳥類が窮状に陥っていて（表1）、それらの保全活動が急務であることを世界の人々に呼びかけた。その第1回は2020年に行なわれた。「世界ペンギンデー」はすでに4月25日に定められている。

註1) ぼくは「アホウドリ」(信天翁、阿房鳥)という軽蔑的で失礼な名前を使わず、「オキノタユウ」(沖の大夫)と呼ぶ。42年間、この種を保全するための研究と活動にかかわってきたぼくが言い出さなければ、このままずっと変わらないだろう。ブラック・ライブズ・マター (BLM) 運動の広がり、アメリカのNFLチーム「ワシントン・レッドスキンス」は長年使用されてきたニックネームを改称すると発表した(2020年7月)。アメリカの伝統ある大学も建物の名前を改称するという。『論語』に「子曰、過而不改、是謂過矣」とある。

表1 ACAP保全対象種(登録年)の2020年の絶滅危惧状況

オキノタユウ類 Albatrosses (22種)	
特別危惧種(註2)(CR)2種	Tristan Albatross <i>Diomedea dabbenena</i> (2004) Waved Albatross <i>Phoebastria irrorata</i> (2004)
絶滅危惧種(EN)7種	Northern Royal Albatross <i>Diomedea sanfordi</i> (2004) Antipodean Albatross <i>Diomedea antipodensis</i> (2004) Amsterdam Albatross <i>Diomedea amsterdamensis</i> (2004) Sooty Albatross <i>Phoebastria fusca</i> (2004) Atlantic Yellow-nosed Albatross <i>Thalassarche chlororhynchos</i> (2004) Indian Yellow-nosed Albatross <i>Thalassarche carteri</i> (2004) Grey-headed Albatross <i>Thalassarche chrysostoma</i> (2004)
危急種(VU)6種	Southern Royal Albatross <i>Diomedea epomophora</i> (2004) Wandering Albatross <i>Diomedea exulans</i> (2004) Short-tailed Albatross <i>Phoebastria albatrus</i> (2009) Campbell Albatross <i>Thalassarche impavida</i> (2004) Chatham Albatross <i>Thalassarche eremita</i> (2004) Salvin's Albatross <i>Thalassarche salvini</i> (2004)
準絶滅危惧種(NT)6種	Light-mantled Albatross <i>Phoebastria palpebrata</i> (2004) Black-footed Albatross <i>Phoebastria nigripes</i> (2009) Laysan Albatross <i>Phoebastria immutabilis</i> (2009) Buller's Albatross <i>Thalassarche bulleri</i> (2004) Shy Albatross <i>Thalassarche cauta</i> (2004) White-capped Albatross <i>Thalassarche steadi</i> (2004)
低危険種(LC)1種	Black-browed Albatross <i>Thalassarche melanophris</i> (2004)
ミズナギドリ類 Petrels (9種)	
特別危惧種(CR)	Balearic Shearwater <i>Puffinus mauretanicus</i> (2012)
絶滅危惧種(EN)	Westland Petrel <i>Procellaria westlandica</i> (2004)
危急種(VU)	Pink-footed Shearwater <i>Ardenna creatopus</i> (2015) White-chinned Petrel <i>Procellaria aequinoctialis</i> (2004) Spectacled Petrel <i>Procellaria conspicillata</i> (2004) Black Petrel <i>Procellaria parkinsoni</i> (2004)
準絶滅危惧種(NT)	Grey Petrel <i>Procellaria cinerea</i> (2004)
低危険種(LC)	Southern Giant Petrel <i>Macronectes giganteus</i> (2004) Northern Giant Petrel <i>Macronectes halli</i> (2004)

出典) ACAP <https://www.acap.aq/en/acap-species/307-acap-species-list/file>
BirdLife International: BirdLife Data Zone

海鳥類が苦境に立たされている最大の原因は、外洋域で大規模に行なわれている延縄漁業や底引き網漁業、流し刺し網漁業など、商業漁業によって引き起こされる偶発的な事故死で、これは漁獲対象種以外の捕獲で「混獲」と呼ばれる。それによって、毎年、推定で約30万羽の海鳥類が見えないところで犠牲になり、その結果、成鳥や若鳥の死亡率が上がり、個体数が減少した。たとえば繁殖地の島の火山噴火のような大規模だが一時的な(急性の)影響よりも、日常的に起こる(慢性の)漁業による混獲の方が海鳥類の個体数をじわじわと確実に減少させる。

もう一つは、人間と海鳥類との食物資源をめぐる“競争”である。海鳥類のえさとなる小型魚類を人間が現代的装備で一網打尽に漁獲すると、海鳥類が利用する食物資源量が減り、その結果、ひながじゅうぶんな保育を受けられず、繁殖成功が低下し、個体数が減少する。この競争で海鳥類に勝ち目はないから、人間が海洋保護区を拡大して、海鳥類の取り分を保障しなければならない。

また、人間が意図せずに繁殖地の島嶼に持ちこんだネズミ類など外来種が海鳥類を捕食し、ときにはものすごく大きな影響をおよぼす。ネズミ類は卵やひなを捕食するだけでなく、ときには成鳥をも襲って、繁殖集団の出生率を大きく下げる。南大西洋のトリスタン・ダ・クーニャ諸島のゴフ島では、非常に大型のTristan Albatrossのひなが大型化したハツカネズミの集団によって体の軟らかい部分をかじられて死亡し、個体数が激減した。そのため、現在、大規模なネズミ駆除作戦が行なわれている。北西ハワイ諸島ミッドウェー環礁では、抱卵中にハツカネズミに襲われて流血したコオキノタユウ(Laysan Albatross)が観察された。南アフリカのマリオン島でも、ハツカネズミに頭部をかじられて流血したハイガシラオキノタユウ(Grey-headed Albatross)の成鳥が確認された。小型のウミツバメ類やミズナギドリ類はネズミ類によってたやすく捕食され、繁殖集団が激減し、場合によっては消滅する。

註2) 文化財保護法の特別天然記念物・天然記念物という分類にならって、特別危惧種・絶滅危惧種とした。一般の人には、日本で使われている「絶滅危惧IA類・IB類」よりも理解しやすいと思う(表2を参照)。

人間が意図的に持ち込んだネコやブタ、ヤギも海鳥類の繁殖に影響をおよぼす。島で野生化したネコは親鳥やひなを襲い、ブタは卵やひなを食べ、ヤギは植物を根こそぎ食べて島の表土の浸食をうながし、営巣地を破壊する。こうして外来種は島の生態系を大きく変えてしまい、海鳥類の繁殖を攪乱し、妨害する。かつて、人間も繁殖地の島に上陸して海鳥類の卵やひな、成鳥を大量に捕獲し、個体数を急減させた。しかし、現在では、海鳥類を意図的に捕まえることは特別な例外をのぞいて、世界的に禁止されている。

これらの結果、過去60年間で、世界の海鳥類の個体数は70%も減少したと推定されている。この激減によって、巨大な集団繁殖地が消えたり、ごく小規模になったりして、地球上で海鳥類のにぎわいは失われつつある。

さらに、人間が排出した膨大な量のプラスチック類が海に流入し、海鳥類の生存に影響を及ぼしている。多くの海鳥類は海面に浮遊するプラスチック類の破片をえさと間違えて“誤食”し、多量に摂り込んだ場合には消化器官をつまらせて死に至る。大海原に流れ出ると、分解されにくい浮遊性のプラスチック類は、海流に運ばれてホンダワラ類などの流れ藻といっしょになり、帯状の塊をつくる。そこには、海洋動物の幼体や稚魚、動物プランクトンなどが集まる。海鳥類の中には、それらの藻類や動物プランクトンから発せられるわずかな臭いを手がかりにして、えさのある場所を探すものもいる。その臭いのものは硫黄を含んだ揮発性の物質である。海面を浮遊するプラスチック類は海中の化学物質を表面に吸着する性質があり、その物質も吸着される。その結果、海鳥類はいい臭いがするものと感じてプラスチックの破片を飲みこんでしまうようだ。

最近の研究によって、誤食されたプラスチック類は、たとえ少量であっても、海鳥の健康に被害を及ぼすことが明らかになった。プラスチック製品の製造過程で添加される化学物質が、胃の中でえさに含まれる油分に溶け出し、体内に吸収されて蓄積し、生理活動に影響をおよぼす。海鳥類の約90%の個体が多かれ少なかれプラスチック類を摂り込んでいるから、ほとんどすべての海鳥が被害を受けていることになる。

将来、気候変動による海洋環境の変化が海鳥類に

大きな影響を及ぼすにちがいない。地球の平均気温が上がり、海水準が上がり、標高の低いサンゴ礁の島々は水没し、そこで営巣する海鳥は繁殖地を失う。水没しないまでも大型化する台風の大波によって繁殖地の景観が変わる。こうした兆しはすでに現れている。海水温が上がり、海水の化学的性質が変化し、海洋生態系が大きく変われば、海鳥類は採食場所を変えざるを得なくなる。さらに海流が変化すると、海洋システムの大規模な転換が起こるだろう。繁殖に適した無人島の数は少ないので、海鳥類はそうした激変に対応できないかもしれない。

日本におけるオキノタユウ類の現状

日本列島ではオキノタユウ (Short-tailed Albatross)、クロアシオキノタユウ (Black-footed Albatross)、コオキノタユウの3種が繁殖している。ほくは伊豆諸島鳥島でオキノタユウの長期個体群モニタリングと保全研究を行ない、並行してクロアシオキノタユウのひなの全数調査を行ない、集団の動向をモニタリングしてきた。

積極的保護計画が実を結び、鳥島のオキノタユウ集団は2018年に繁殖つがい数が1000組に到達し(図1)、総個体数が推定で5000羽を超えた。繁殖集団は毎年約8%の割合(9年で倍加)で指数関数的に成長している。

また、鳥島のクロアシオキノタユウ集団も着実に成長し(図2)、2018年4月に巣立ち近いひな2870羽を確認した。その繁殖期に、おそらく約4500組のつがいが繁殖し、総個体数は

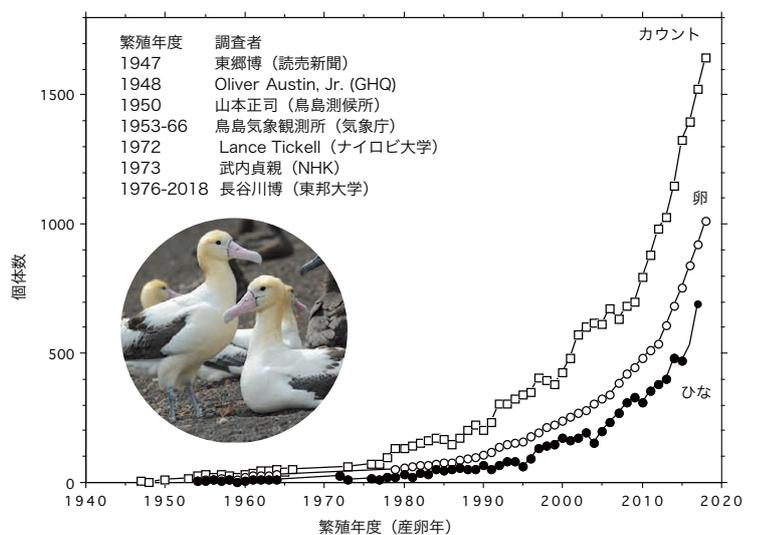


図1 伊豆諸島鳥島におけるオキノタユウ集団の成長(まとめ:長谷川博)

20000羽を超えた。クロアシオキノタユウは小笠原諸島や尖閣諸島でも個体数が増加し、最近、八丈島の西にある八丈小島に自発的に“入植”して、繁殖を開始した。

コオキノタユウは1930年代に伊豆諸島鳥島で約60羽が繁殖していたが、1939年に起こった鳥島火山の大噴火のあと、鳥島から姿を消した。その後、1970年代半ばに小笠原諸島聳島列島で繁殖が確認され、少しずつ個体数を増やし、営巣分布域を拡大してきた。伊豆諸島鳥島にもときどき姿を現し、着陸することもあるが、繁殖には至っていない。

日本列島の海鳥類

四周を海に囲まれ、大小数千の島々から成る日本列島には、39種の海鳥類が繁殖し、そのほかに約60種が周辺海域を訪れる。日本で「絶滅のおそれのある種」に指定されている鳥類98種のうち、20種が海鳥で(表2)、約2割を占める。また、繁殖する海鳥類のうち約半分の19種が絶滅の危機に瀕している(20種のうち1種は日本列島で非繁殖)。さらに、準絶滅危惧種の3種、希少種と推測されるが繁殖状況についての情報が不足している種である2種を含めると、日本列島で繁殖する海鳥類の大半が厳しい状況に置かれていることになる。

したがって、日本ではオキノタユウ類3種だけでなく、その他の絶滅のおそれのある海鳥類を含めて、それらの置かれている苦境を伝え、保全の取り組みを強めることが必要とされる。そのために、毎年6月19日を含む1週間を「世界アルバトロスデー&シーバードウィーク」とし、多くの団体が協力して講演や展示などのイベントを開催し(2020年は、残念ながら新型コロナウイルス感染症の拡大のため、開催は中止された)、日本の海から海鳥類が減少し、姿が消えないように努力して行きたい。

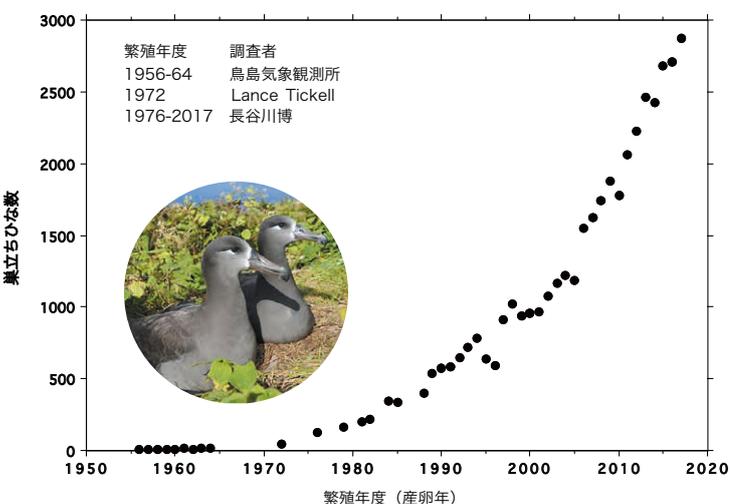


図2 伊豆諸島鳥島におけるクロアシオキノタユウ集団の成長(まとめ:長谷川博)

表2 環境省レッドリスト2020に掲載されている海鳥類 (括弧内はそれぞれのカテゴリーに含まれる鳥類種の数)

絶滅危惧IA類(CR)6種(24種)
オガサワラヒメミズナギドリ <i>Puffinus bryani</i>
クロコシジロウミツバメ <i>Oceanodroma castro</i>
チシマウガラス <i>Phalacrocorax urile</i>
エトピリカ <i>Fratercula cirrhata</i>
ウミスズメ <i>Synthliboramphus antiquus</i>
ウミガラス <i>Uria aalge</i>
絶滅危惧IB類(EN)4種(31種)
コオキノタユウ <i>Phoebastria immutabilis</i>
セグロミズナギドリ <i>Puffinus lherminieri</i>
アカアシカツオドリ <i>Sula sula</i>
ヒメウ <i>Phalacrocorax pelagicus</i>
絶滅危惧II類(VU)9種(43種)
オキノタユウ <i>Phoebastria albatrus</i>
ヒメクロウミツバメ <i>Oceanodroma monorhis</i>
スグロカモメ <i>Larus saundersi</i> (非繁殖)
コアジサシ <i>Sterna albifrons</i>
オオアジサシ <i>Sterna bergii</i>
ベニアジサシ <i>Sterna dougallii</i>
エリグロアジサシ <i>Sterna sumatrana</i>
ケイマフリ <i>Cephus carbo</i>
カンムリウミスズメ <i>Synthliboramphus wumizusume</i>
準絶滅危惧種(NT)3種(22種)
クロウミツバメ <i>Oceanodroma matsudairae</i>
オーストンウミツバメ <i>Oceanodroma tristrami</i>
オオセグロカモメ <i>Larus schistisagus</i>
情報不足(DD)--- 2種(17種)
シロハラミズナギドリ <i>Pterodroma hypoleuca</i>
マダラウミスズメ <i>Brachyramphus perdix</i>

出典) 環境省レッドリスト2020[鳥類]
<https://www.env.go.jp/press/files/jp/114457.pdf>



長谷川博 はせがわひろし

東邦大学名誉教授・OWS会長
 1948年静岡県生まれ。京都大学卒業。1976年から伊豆諸島鳥島に生息する絶滅危惧種オキノタユウの保護研究を続け、吉川英治文化賞、日本学士院エジンバラ公賞などを受賞。『風にのれ!アホウドリ』『50羽から5000羽へ』『アホウドリに夢中』『オキノタユウの島で』『アホウドリからオキノタユウへ』など著書多数。



World Albatross Day

<https://albatrossday.org/>